

2017年10月18日



株式会社 カネカ 支援 海外アーカイブ・ボランティアの会 2017年度活動報告会

UNHCR 登録局資料 Fonds11/シリーズ 3/001

整理と研究

～国際機関アーカイブ整理プロジェクト報告会～

日時： 2017年11月6日（月）午後2時～4時

場所： KANEKA 東京本社



プログラム

司会：金山正子（元興寺文化財研究所）

- | | |
|-----------------------------------|-------------|
| 1、開会あいさつ 小川千代子（国際資料研究所） | 14：00～14：05 |
| 2、UNHCR アーカイブズの運営 松村光希子（学習院大学大学院） | 14：05～14：25 |
| 3、2017年の整理対象資料 元ナミ（京都大学大学文書館） | 14：25～14：45 |
| 4、2017作業概要 小川千代子（国際資料研究所） | 14：45～15：05 |
| 補足：松村光希子、大西愛 | 15：05～15：15 |
| 5、これまでの経緯と今後について 大西 愛（大阪大学出版会） | 15：15～15：35 |
| （休憩） | 15：35～15：45 |
| 6、 質疑 | 15：45～15：55 |
| 7、 閉会挨拶 大西愛 | 15：55～16：00 |

司会・進行 金山正子

アンケート回収 元ナミ

参加費無料、懇親会（参加費 5000 円）

参加申込み締切 10月31日（火曜日）メール必着

参加申込・問合せ

海外アーカイブ・ボランティアの会あてメールで：kaigaiarchiv@gmail.com

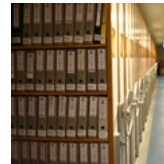
★会場の都合により、報告会へのご参加は先着40人までとさせていただきます。

★お申し込みは下のアドレス宛メールで件名欄に「11月6日報告会参加希望」とご記入の上、文面にはお名前、ご所属をご一報ください。お申し込み時に頂いた情報は、本報告会の運営のためだけに用います。 kaigaiarchiv@gmail.com

【参考】9月14日付朝日新聞グローブ Web版でこの活動が紹介されました。

朝日新聞 Globe 編集部のご厚意で部分転載しています。

The Asahi Shimbun
GLOBE



Webオリジナル

記録を語る

「難民の記憶の糸はここに」～UNHCR アーカイブ

国連難民高等弁務官事務所 モンセラート・ガラヨア氏に聞く



書庫に立つモンセラート・ガラヨア氏
＝写真はいずれも高橋友佳理撮影

UNHCR は 1950 年に国連機関のひとつとして立ち上げられた。難民や国内避難民、帰還民や無国籍者が避難先や移住先の国で支援を受けられるよう、各国政府に働きかけている。発足当時の難民は 100 万人ほどだったが、いまや 6500 万人にふくれあがり、128 カ国で活動を行っている。

当初、UNHCR ではアーカイブをつくることはルール化されていなかった。

データは作られ保管されていたが、組織内での利用にとどまっていた。研究者でもあった緒方さんは研究者やジャーナリストたちにも記録が公開されるべきだと考えた。90 年に高等弁務官に就任し、96 年にアーカイブは始まった。

緒方さんは退任した 2000 年、高等弁務官としての最後の日に UNHCR の書庫を訪れた。自分の名前が書かれたファイルがきちんとそこにあるかを確認したのだ。

日本から毎夏、アーキビストが資料整理に

09 年から毎年、日本からプロのアーキビストたちがジュネーブに来て、ボランティアで資料整理を担ってくれている。国際資料研究所を主宰する小川千代子さんをはじめとする経験豊富なアーキビストたちで、最近では「海外アーカイブ・ボランティアの会」の名前で活動し



今夏、UNHCR で資料整理を行った右から大西愛さん、元ナミさん、小川千代子さんとガラヨア氏
＝海外アーカイブ・ボランティアの会提供

難民支援に取り組む国連難民高等弁務官事務所 (UNHCR) には、難民やそれを生んだ紛争についてのアーカイブがある。それは 1996 年、当時の高等弁務官だった緒方貞子さんのイニシアチブで始まった。なぜ難民の記録を残すのか。どうやって。スイス・ジュネーブにある UNHCR の本部を訪ね、記録管理・アーカイブ課長を 10 年にわたり務めるモンセラート・ガラヨア氏 (57) に聞いた。

「難民は苦しみを記憶する権利を持っている」

私はまだ課長ではなくスタッフだったが、その場において緒方さんにアーカイブを見せることができた。今でも光栄に思っている。緒方さんのファイルは退任から 20 年後である 2020 年に開示される予定だ。緒方さんの後、高等弁務官に関するファイルはアーカイブに送られてきて保存されるのが伝統になった。

危機が起こり、終焉すると人々は母国に帰ったり第三国などに移住したりするようになる。その時彼らが持っている記憶の糸は、アーカイブにしか残っていない。人々の記憶を保管することで歴史を保管していきたいと思っている。経験した苦しみやそこからの解放を記憶していく権利を彼らは持っていると思う。アーカイブというのは勝者の物語を保管するところではないか、とよく言われる。被害者、犠牲者は忘れ去られがちだ。しかし私たちは犠牲者を助ける組織であるから、犠牲者の記憶こそが重要であり、その記録を保管していきたいと考えている。〈中略〉

ている。扱いが難しい資料の整理もこちらが教えることなくやってくれる。UNHCR の職員の中には、アーカイブを作る仕事があることを知らない人もいる。そんな時、「はるか遠く日本からアーキビストがやってきて、この作業をしているんですよ」と宣伝に使わせてもらっている。今年も 8 月末から約 10 日間小川さんら 4 人が訪れ、公開間近の 85 年から 95 年の資料整理を手伝ってくれた。日本では記録行政が遅れていると言われるが、私が知る小川さんをはじめとするアーキビストたちは大変すばらしく、その貢献に感謝している。(構成・GLOBE 記者 高橋友佳理)

<http://globe.asahi.com/feature/side/2017090600001.html>

(2017-09-27 確認)

この記事は朝日新聞 Globe 編集部のご厚意により転載しました。